

伝承から見た耶馬台国

有 木 馨

現住所 大分市大字三佐二一三〇

略 歴 出生 神奈川県小田原市国府津

早稲田大学法学部英法科昭和五年卒

鉄道省運輸局、大同製鋼株式会社

昭和二十二年退社大同工業所経営

明治三十七年十二月生れ

魏 志

日本古代史の探究は大陸諸国に比べてその困難さは甚だしい。大陸諸国が石造の構築物が多い為めに、よしそれが廢墟であるにしても、埋没してゐるにしても、動かすべからざる物的資料が有形的に存在するし、又発見されるであらうと云ふ期待も持たれる。象形であるにしても契形クワシであるにしても、判読可能な文字もある。けれども日本は木造が主体である為め多く壞滅して廢墟さへ残つてゐない。この為めに古代史の支たへになる考古学的資料も甚だ乏しい事になる。古墳は可成り多いが、これは三世紀後半から六世紀仏教渡來の頃までのもので此處で取上げる中国の漢魏に當る時代のものは余り多いとは云へない。

又文献資料では、日本書紀、古事記、風土記などもあるが、古事記は「語り部」と云ふ世職の家が子々孫々に語り継がれたものを奈良朝の時代に文字にしたものである。これはアイヌ社会の「ユーカー」の様なもので「物語り」又は叙事詩とも云ふべきもの、西洋に例を求めればホーマーの「オディセイ」の様なものであつて史学の資料としては甚だ頼りがない。又日本書紀の方は舍人親王を主班として編まれた官編の正史ではあるが、執筆者は中国帰化人であつて中国史書を範としてゐる上に、周辺の諸外国に我國の国基の古さを誇示しようとした國際的政治意図が多分にあつて、架空の天皇を創り上げ、年代の延長を計つた。その為め、武内宿弥の三八〇歳の様な事にもなる。そこで私はこれ等の文献は日本の各地に伝る説話を集めたものとして敷衍事とし、上代史を考へる場合単に参考資料たるに止め、既に史学を持つてゐたし、文字は勿論曆法も確立してゐた中国の人が客觀的に日本を見て書いた中国史書に、歴史としての信憑性を見出すものである。「魏志倭人伝」「後漢書」「宋書」などがそれであるが、その外に明治時代鴨緑江上流で発見された高句麗の好太王の碑文がある。好太王の業績を称へた長文のものであるが、この中に倭軍との戦斗に可成りの字数を割いてあり、看過出来ない貴重な文字である。以上の内、史学界で最も重視され、且つ研究対照とされたものは「魏志倭人伝」である。日本の記紀が八世紀に編まれたものであるのに対して、これは晋代の人陳寿の筆になるもので、三世紀後半に書かれた「魏略」からの引用を多く含んでゐて、記述に同時性がある点は、好太王の碑文と同じだと思はれる。又魏の使者は帯方郡から数度海を渡つて北九州に来て居り、卑弥呼の死、耆与の冊立の項は可成り長期間、伊都に滞在して日本の風俗、習慣、政治状態などを觀察してゐた模様である。

倭

この項は日本も朝鮮も採集經濟（別の言葉で云へば縄文土器の時代）は既に終つて水田農耕の時代、考古学上の言葉を借りれば、弥生式文化の時代である。狩猟漁、遊牧、移動の生活から定着集團の生活に進んでゐる。灌漑、排水その他の土木工事も興り、労働力を結集する必要もありで、支配、被支配の關係も生れて身分差も起る。又外敵の侵入対策として武を専門職と

する武人も生れたらうし、集団を統治する政治の組織も出来て来た。又水田農は天候に左右される率が多い為め、天を祭り豊作を祈る神事が重要な事となり、よく神事を司る者が部落民の尊崇を受ける事となり、その統率者となる。これが原始社会に祭政一致の起る理由である。日本では巫子と呼ばれる女性がそれで、伝承に残る有名な名を挙げれば大日靈貴、保食神、倭姫などがある。一体神がかりの状態になれるのは、理性の強い男性より女性の方がなり易い。近世でもそうであつて、天理教のおみぎ婆さん、大本教のお直婆さん、近くは躍る宗教の教祖もそうだし、フランスのジャンダークなどもこれに近い状態ではないかと思ふ。

そこで「倭」と云ふ字であるが、中国で日本を「倭」と呼んだ事は可成り古く、漢魏の前周代からの様である。これは南方民族の（セマング語）言葉で「女性」の意、随つて女王国の意と説く学者もあるが私は日本語の一人称に「わ」の音が多い事に起因すると思ふ。「儂」「私」「我」「和ごぜ」等数へたら切りがない。「お前の国の名は何だ」の問に対し「わが国」又は「わしがくに」などと答へたらう。これが「倭」と云ふ称呼を生んだ原因だと私は考へる。中世日本人がアイヌに対し「お前は何だ」と聞いたのに対して「人間だ」と答へた。向ふは「俺は人間だ」と云つたつもりだが、これが「アイヌ」と云ふ民族名になつて仕舞つた。

（註）ついでに附言すれば内地人の僧侶が北海道布教にアイヌ部落を訪れ「我は沙門なり」と云つた事が今に至るまで和人を指して「ジャモ」と呼ぶ様になつたと云はれる。

この「倭」と云ふ文字が日本人に喜ばれず、漢字に習熟してから「和」に置き替へられ、これに「大」をつけて「大和」と書き「やまと」と訓ずる様になつたと思ふ。

徳川時代博多の志賀島から百姓甚兵衛に発掘された後漢の金印の事であるが「漢委奴国王」の読み方である。「委」であつて「イ」（にんべん）がないので、大ぶん論争されてゐる。通説は「漢の倭の奴国王」であるが「にんべん」が無い為めに「漢の委奴国王」と読むべきだと云ふ人もある。こうなると今の博多（灘津）ではなく、伊都（今の糸島郡）になつて仕

舞ふし、今では殆んど省られてゐない。

「耶馬台」は何処か

A 九州説

魏志にしても後漢書にしても「大倭王耶馬台の国に居る」と云ふ次第で、倭と呼ばれたその頃の日本の中心は「耶馬台」であるが、この「耶馬台」が日本の何処であるか、これが魏志の中心問題であつて、畿内の大和（奈良県）とする説と九州であるとする説とが花々しく論ぜられて、今に至るも結着が着いてゐない。魏の使者が朝鮮の帶方郡を發して「狗邪韓國」（今の釜山辺）から海を渡つて对馬―壹岐―松浦に着船し、そこから上陸して伊都（今の福岡県糸島郡）に落ち着く。伊都から奴国（今の博多）それから不弥でこの辺までの方向里程は略々正確なのだが、これが奥に入ると水行何日陸行何日、投馬―耶馬台の辺りがハッキリしない。「耶馬台」の音感からすれば「やまと」と讀むにしても又は「やまたい」と讀むにしても畿内の大和に近いのであるが史学的考察からはそう簡単に断ぜられない。「この耶馬台国」は三十余の附属国を持つてゐた様だし、伊都には「一大率を置いて監察す、諸国畏憚す」と云ふ訳で、行政監察の出先機関もあつた。又女王卑弥呼の宮殿は「桜觀城柵嚴かに設く、常に兵を侍して守衛す」とあるからあながちに天地根元造りの掘立小屋でもあるまい。この問題は徳川時代の国学者本居宣長以来九州説をとる人が多く。戦前は九州説七分畿内説三分と云ふ所で畿内大和説は弱かつた様に思ふ。

これは日本人に潜在する菊のカーテンの爲めであると私は考へる。萬世一系思想が災して日本列島に主權の併存を承知しない感情もあり、現皇室の祖先が中国の朝廷に臣礼を執り、その封冊を受けたと云ふ事が国辱の感情を呼び、国体の尊嚴を損ふものであると云ふムードであつて、「危きに近よらず」の東洋人的箝晦術から「九州の辺民の仕業」と云ふ事に片づけて仕舞つた様である。この問題と取組んで行くといやでも現皇室の祖先にふれる事になる。不敬罪と云ふ刑法もあつたし、その背後には右翼団体と云ふ恐ろしい眼も光つてゐる。そこで魏志の耶馬台国は現日本国とも、日本の皇室とも全然關係のない九州の辺土に片づけ、その女王「ヒミコ」は、熊襲の女酋まで下げてゐる。久米邦武博士も「外交は海神の世職にして、天朝は与り

給はざりしこと事実なり」と云ひ「耶馬台」は肥後国菊地郡山都郷或は筑後国山門郡とし、女王「ヒミコ」は八女津媛であるとされてゐて、その讃同者も可成り多い。が畿内説にしろ、九州説にしろ、決定的な「きめ手」がない。反論の根拠はいくらでもある。後漢の光武帝から金印を貰つた「奴国」は現実にその印が出土したので論争の余地のない物的証拠である。卑弥呼も「親魏倭王」の金印を貰つてゐるし、その使者も銀印を貰つてゐるので、どちらでもいい何処からか発掘されて、日の目を見れば所謂きめ手でこの論争に終止符が打たれるのであるが、これは百年河清を待つ様なものである。

B 本州説

畿内の大和だとする説は、終戦後の国体觀念の変化の影響から許りではなく、古墳研究から勢をもち返した様に思はれる。卑弥呼が魏の朝廷から貰つたものの中に「銅鏡百枚」とある。この魏時代の鏡が大和地方の古墳から可成り出てゐる事、先進文明の魏から異例の厚遇を受けてゐる事、南鮮辺りまでヤマト国の勢力が及んでゐた事、「一大率を置いて檢察より諸国畏懼す」これは大宰府の前身が既にあつた事であり、これだけの国力は九州の地方的政權ではなく、もつと強大な大和朝廷である。又この時代は記紀の態襲征討の時代、九州の土豪はいづれも大和朝廷の統制に服し、女王国の様な存在はあり得ないと説くものである。けれどもこれは書紀の記年にとらわれ過ぎての事であり、筑豊に栄へた耶馬台政權もその富と勢力と共にその本拠を畿内に移動させた事も考へられる。又魏代の製作と考証される鏡が九州の古墳から全然出ない訳でもなく、畿内のそれと比較して少いと云ふに止る。鏡の様な貴重な宝器は伝世性もあるし、移動性もあつて決定的な「きめ手」とは云ひ憎い。

魏志の耶馬台国問題を最初に手をつけたのは本居宣長や伴信友の様な徳川時代の国学者ではなく、実に奈良朝時代の日本書紀の編者である。三世紀の前半、魏の明帝の時代に神功皇后と云ふ大英雄を創作して、国の内外に大活躍をさせて倭人伝の記述に合せてゐる。皇后の在位はAD一九三年から二六九年（摂政となるのは二〇一年）で魏志に書かれた卑弥呼の第一回の遣使はその央ばの二二八年に当る。文字の無かつた往時三〇〇を遡つて歴史を書く時この位の創作はさして困難ではなかつたであらう。これは後世繰返された魏志の解釈ではない。魏志を種本として、日本の歴史を創つたと云ふものである。明治以前この

問題を取扱つた学者は、概ね神道学者で、天孫降臨説を信奉する立場から、耶馬台や「ヒミコ」は天孫民族外の態襲の女酋にして、場所も大隅の贈噺郡辺りとした本居宣長説に代表される。明治以後は筑後山門郡に耶馬台國を比定する説が強いが、これは「やまと」と云ふ音感地名にこだわりの過ぎての事で、考古学的にも、伝承の点でも裏附けが乏しいし、第一魏志に書かれた方向里程にも合致性が少い。

C 宇佐説

ここに新しく登場したのが大分大学の富来隆氏の「耶馬台宇佐説」である。富来氏は倭人伝の方向軸に六、七〇度のズレがある事を前提として、耶馬台國の所在場所を求めてゐる。奴國—不弥それから投馬（この投馬も困つた問題で設馬の誤記である。従つて薩摩と読むべきだと云ふ人もあるし、但馬だと云ふ学者もある）これは富来氏の云ふ通り現関門辺の「ともの津」と云ふ場所だと私も考へる。この「投馬」から南へ水行十日、陸行一月、これが魏志の云ふ「耶馬台」の所在場所である。富来氏はこの場所を駅館川下流の豊前平野に求めてゐる。到つて面密な研究でもあり、海流の研究など新しい分野の開拓であり大いに敬意を表する次第で、中央学界にも注目されてゐる模様である。この宇佐説にも弱点がないでもないが、私は筑後説よりもこれを採り度い。

富来氏は魏志にある「東海を渡る千里又國あり：」この点筑後山郡でも奈良県大和でも合はない事に力を入れて居られる。「國の東」と書いて「クニサキ」と訓むも、後年の事ではあらうがこれもうなずける事である。この旁証を別に求めると「新羅史」である。新羅六世の王（脱解）は倭人であつて、その記する所「脱解本多波那國生るる所なり其國倭國の東北千里初めその國王女王國の王女を娶り妻となす姪有り：云々」でここに生れた男子が新羅に入り六世の王脱解となつたと云ふ訳であるこの「多波那」は今の丹波地方で、倭國の東北千里を逆算すれば、正に九州豊前地方と云へるし、「女王國の王女を娶る」に千金の重みを感じる次第だ。この但馬丹波が日本上代の特殊地帯で、南韓との往復も多く、相互に通婚も植民もあつて、倭、但馬、南韓の三角形は何か特殊の紐帯で結ばれてゐた様に思はれる。ここに引用した「新羅史」の史学的ウエイトは知らない

が、富来氏が力を入れて居られる魏志の「東海を渡る」云々よりも更に宇佐説を裏付ける有力な文献的旁証の様に私は思ふ。

富来氏の「水行十日」はいいとしても「陸行一月」に困るのだが、これは「一日」の誤写と見なければならぬ。写本の時代なので、長い間に多くの人の筆写の内に誤記の出るのは仕方がない事で、種本が一つ間違へばそれから筆写される幾百の本は皆そうなつて仕舞ふ。これは通説と云はれないまでも一月は「一日」の誤記と云ふ学者の多い事も事実である。

女性支配の事

「耶馬台九州説」のも一つの根拠は女性支配の問題である。大和朝廷にも神の意思を伝宜する「キコエオ、カミ」と云ふものがあるが、これは巫子的性格が強い。魏志の卑弥呼は「鬼道を事とし衆を感ず」とあるのでこの面もあつたらうが、三十に余る小王国の連合体を統率した上、海を越へて先進文明の魏の都洛陽にまで使を出し、生口とか倭錦などを持つて行つて莫大珍宝、宝器を稼いでゐる。見様によつては一種の貿易でもあらうが天晴れの女王ぶりである。記紀の伝へる所でも、九州の部族の首領は概ね女性である。「阿蘇津媛」「速見津媛」（現在の速見郡）「八女津媛」（筑後）「田油津媛」「早吸日女」（現在の佐賀関と云はれる）「菟狹津媛」（豊前宇佐平野）「神夏磯媛」（現中津辺）等で殆んどが女性の統治する部落国家である。久米邦武博士はこの八女津媛が魏志の云ふ「卑弥呼」であるとして筑後八女郡の辺りが耶馬台であるとされてゐる。然し、八女郡では魏志の示す方行里程に合はなし、九州の北半と山陰地方を包含した連合体の中心である国の地理的条件にも合致しない。私はここに挙げた女王の中から魏志の卑弥呼に近い人を探すとすれば「菟狹津媛」か「神夏磯媛」の様に思ふ。「うさつひめ」の事は富来氏が詳細に論じてゐるので省く事にすが、神夏磯媛の国は現在の中津の附近と云はれ、山国川を挟む水田部落の郷であらう。今の大貞公園の辺りが中心ではないかと思ふ。この女王は、玉、鏡と剣を木の枝に架けて外来軍を迎へる下りが書紀に見へる。而もその鏡の名は「八咫の鏡」で、現皇室に伝へられる神器と名は同じである。見方によれば統治の主権を大和朝廷に献上した様にも見へる。この地方に「京都郡」の字が当てられて「みやこ郡」と読むことも注意されていいだらうし、あれから北、小倉寄りに巨大な石塊が山の根にある事も、汽車の窓から望まれる。これが神籠石と思はれるし、帝

塚山古墳群と共に実地踏査が望ましい次第である。

八幡宮の事

宇佐八幡は一般に応神天皇を祭ると云はれてゐるが、これは平安朝以後の事で、この実体は明かでない。後に八幡社は源氏の氏神となつて軍神の様に思はれてゐるが、鍛冶部だと云ふ人もあるし、鉾山の神だと説く學者もある。小野玄妙博士は、密教の不動明王の信仰から發したものとされてゐる。これは傾聴に値する考へで、国東半島に多い靈山・靈場や英彦山と思ひ合せると在来の神道に、密教の不動明王が合体して国土安穩を祈る信仰となつた様に思ふ。これは家永三郎博士等も説いて居られる。

この宇佐八幡は、律令時代になつても、中央政府から特別の優遇を受け、社領も多く、その勢力は大宰府にも匹敵する觀があつた様だ。又積極的に中央の政治に介入した模様も窺へる。奈良の大仏建立が難行してゐる時、(天平勝宝元年)彌宜かき「おみわのもり女」は神の代參と称して上京し、東大寺を拜して「一品」とか「二品」とかの官位を受け、大仏鑄造の成功を八幡に謝する宣命を読ませたりした上、その分社を平城宮の南梨原の宮に建てたりしてゐる。これはまだしもとして、その次が道鏡事件の立役者である。女帝のあれ程の執心を挫いたのは、反道鏡派勢力が、和氣公を使つての芝居ではあらうが、宇佐八幡の神託がどうしてあれ程の権威があつたかと云ふ事である。皇統の危機にこの問題なら伊勢神宮にお伺ひを立てる―これが筋であるべき筈であるのに、近くの伊勢は一向に顧られず、遠く宇佐に神託を求められ、その結果さすがの女帝も、その執念を断念せざるを得ない、事皇統に關して宇佐八幡の神託が何故にこれ程の威力があつたか―正に史上の謎ではないかと私は考へる。

岩戸がくれ

ここで私達は既成の觀念を払ひのけて静かに考へて見よう。この時代九州の北半から山陰地方にかけて三十余の国の連合体を統べ、先進文明の中国の朝廷から異例の厚遇を受け、數度に亘る遣使、先方よりも答礼の使者を迎へてゐる程の女王の名が

その本國の伝承に残らない筈はないと云ふ事である。我國の上代一番尊崇されてゐる女性の神が、伊勢の内宮に祭られてゐる天照大神「おおひめき」である事は、誰でも異存はない事と思ふ。大和朝廷と宇佐神宮との關係は少し突つ込んだ考察が望まれる事で、私の結論を以てすれば宇佐地方を本拠とした耶馬台が畿内に移つた後、神殿を建てて祖先の卑彌呼を祭つたのが宇佐神宮の起源であると考へ度い。丁度出雲譚國の後、大國主命の居館が今日の出雲大社となつたのと軌を同じくするものではないかと思ふ。

魏志倭人伝に曰く「卑彌呼以て死す（中略）更めて男王を立つ國中服せず、更に相誅殺す、當時千余人を殺す、復た卑彌呼の宗女志与を立つ、年十三にして王たり、國中遂に定まる」魏志の云ふこの下りは、日本の伝承では「岩戸がくれ」であつて卑彌呼の崩、その涼闇、男王治下の混乱を、日神の岩戸がくれによる暗黒とし、八百よろづの神ばかりにはかり給つた結果年十三の「志与」を王に冊立する。即ち岩戸を閉じて出現した光彩りくりたる新女王の志与を仰いだ耶馬台國の大人下戸の歎喜の模様を岩戸神樂の物語だと私は考へる。この志与の「志」は「臺」の誤写であつて「とよ」と訓むと云ふ学者が多い。私も「とよ」であつて豊玉姫なども閑運がある様に考へる、「豊あしはらの瑞穂の國」は豊前平野であると考へ度い。又神話の海幸山幸のこと、豊玉彦の海神の國は姫島ではないかと考へられるし、志与の子孫は、海神の國との結合によつて中原に進出する事が容易になつたと思はれる。

狗 奴 國 の 事

これも魏史の解釈上厄介な問題で、従来は熊襲説が多い。富來氏は四國の河野郷に比定して居られる。これは富來氏の新説であつて、相当注目されてゐる様であるが、私は「出雲」であると考へ度い。後漢書に「女王國より東海を渡る千里狗奴國に至る皆倭種なり女王國に屬せず」とあつてこの「女王國に不屬」の点は魏志と一致するが、方向は魏志が南であるのに対して東となつてゐる。富來氏の研究による方向軸のずれに従へばこの東は東北になり出雲は方向里程共略々合するものと思ふ。そこで私は敢て「狗奴國」を出雲とし、その男王「卑彌弓呼」をスサノオであると考へ度い。

この卑彌弓呼との争ひは卑彌呼も手を焼いた模様で、AD二四七年使を帯万部に出して相攻撃する状態を訴へ魏の援助を求めてゐる。魏よりは特使を立てて詔書黃幢を齎し、「告諭せしむ」とあるので、講和の勧告であらう。卑彌呼はこの争ひの中に死んでゐる。これ等の事は日本社会が統一に向ふ過程の苦悩であつて、ササノオの子の時代所謂出雲讓国と云ふ事があり、これで耶馬台は前から連繫の強かつた但馬、丹波と直接につながる事が出来て、やがて畿内進出が可能になつたものと考へられる。卑彌呼が狗奴国との戦を重視してその為に命を縮めた様にも見へるし、魏帝の告諭位で容易に断念出来なかつた理由もこの辺にあると思ふ。「狗奴国」は音感の点では出雲と近似性はないが、律令時代出雲国府のあつた地方の海寄りに「河波」と云ふ地名のある事は注目されていいと考へる。

畿内

この次に来るのが、中国では南北朝と称せられる時代で、江南に晋、宋が興り、北の魏との抗争が繰返され、塞北の韃靼タタールもしきりに活動を始めて魏はその挾撃に遭つて弱つて来る時代である、朝鮮は満洲の吉林省の辺りに興つた高句麗次第に強大となり鴨緑江を越へて南下を始める頃で、我國は難波の「高津ノ宮」の時代である。国内的にも統一が完成に近づいた頃である（応神—仁徳）。宗は日本で云ふ呉であつて、養蚕、紡績、機械などの技術も輸入されるし多くの技術移民文化の大発展に向ふ頃である。これ等のために充実した国力は海を越へて北に伸び、南韓に直轄の足場（任那）を持ち、百済は保護国となり、新羅にも度々出兵して南鮮殆んど日本の勢力圏になつてゐる。この事は高句麗の好太王の碑文でも又中国の史書でも客観的に証明されてゐる事で、日本文献の自画自讃ではない。現在大阪に残つてゐる仁徳陵、底面積はギゼーのピラミットよりも大きいと云はれる巨大な前方後円墳の構築の出来た事も故なきではないし、この陵が九州朝鮮に通づる水路を見下らせる丘の上に造られた事も、何かの意味がある様に思ふ。

以上の事から推論すると初代の畿内大和の天皇は、応神か仁徳かと云ふ事になる。諸先学の研究と恐ろしく喰ひ違ひ、肌ざむさを覚へるのであるが一般に云ふ「神武東征」を私は耶馬台国が、その本拠を九州から畿内へ移動させた事と考へ、高津

宮以前の何代かの天皇の存在を抹殺する考へはない。この畿内への移動―所謂「神武東征」は世界的な民族移動の一環と思ふよりも、高句麗と云ふ騎馬民族の強大化とその南下に伴ふ国防上の必要からの後退守勢ではないかと思ふ。丁度天智天皇が白村江の敗戦の後、唐と新羅の連合軍の来襲を恐れて都を近江の大津まで後退した事と軌を一にしたものではないかと思ふ。

この頃日本の五代の天皇(註)（瓊―珍―興―濟―武）が宋に使を出して朝鮮半島に於ける日本の軍事的ヘゲモニーを承認して貰ひ「使持節都督倭、新羅、秦韓慕韓六国諸軍事鎮東大將軍倭王」と云つた様な辞令を貰ひ、これを錦の御旗として諸韓国に臨み新羅を奄有してゐる高句麗の軍と大決戦を繰返し、日本の保護国である百濟救援にも大きな犠牲を払つてゐる。この宋帝の表文は五代とも同じではなく「鎮東」に対して「安東大將軍」としてあるものもある。中国朝廷から封爵を受ける事に国辱感を抱く人もあるが、これは中華思想にこり固つてゐるこの国を相手の東洋諸国の外交慣例と思ふより仕方がない事で決して卑下に過ぎた事でもなく、先方よりも答礼の使節が来てゐる。又見方によれば近世の外交上の手である遠交近攻政策でもある。

（註）倭王瓊これが仁徳と解するのは通説で宋の永初二年、元嘉二年と二回遣使。最後の「武」が雄略天皇と云はれてゐる。

結 語

以上が私の耶馬台豊前説の概略である。要約すれば、1. 耶馬台国の中心は豊前宇佐平野である事 2. その勢力圏は九州の北半から山陰の丹但地方に及んで居り南韓にも足場を有し次第に統合が進んで来た事、丹但を通じて新羅とも関連のあつた事、中国魏より倭国の中心として認められ、その存在は高く評価されて後年耶馬台が日本の国号となる事、3. その後敵国「狗奴国」は出雲地方である事、出雲の併合によつて豊前の耶馬台は地方的政權から脱皮して畿内進出に向ふ事、4. 畿内大和朝廷は卑彌呼の耶馬台政權の後身である事、などである。書いてゐる内に自分の浅学と不勉強を暴露する様な気もするし、歴史マニアの独断と云ふ諍りも免れないと思ふ。これは先学諸氏の御教示を望んでやまない所です。

又私の所論の弱点を挙げれば、言語学的には日本人の中核をなす民種が、アジアの北種でなければならぬのに、米作を主

体とする水田農耕民種であり、鯨面、又文身の風俗もあつた事を是認する事となり、南方種となつて仕舞ふ事、記紀に伝へられる四道將軍や熊襲征伐をどう見ていいか、この辺が私の所論の苦しい所である事を自認してこの稿を終る。

— 以 — 上 —

「社会科」教育と「社会科学」

富 来 隆

戦後の学校教育の大きな特色の一つに「社会科学」の新設があることは周知のとおりである。だが「社会科学」は「社会科学」ではなくて、社会科教育であり、歴史・地理・政治・経済等々を学ぶための基礎学力として考えられる、という見通しである。

戦前にはこれと似たような、似ないような変てこなことが歴史科において行なわれていた。「歴史科」教育と「歴史学」とは異なるという考へであつた。日本神話や南北朝やらの問題をかかえての、学校教育における歴史科と歴史学との矛盾の解決策であつた。

戦後の学校教育における「社会科」教育が、「社会科学」ではないとするのは、それとほだい趣を異にして論争が行なわれて来たものであるらしいが、それでも教育と科学とを別けて考えようとする点では同様と言えよう。このことは、へたをすると、「社会科」教育が「社会科学」としてでなく戦前のように「政治的」に取扱われる危険性をはらむことになりかねない。

教育は科学と無縁でもなく、対立するものでもない。それどころか教育は科学と密着し、その成果の上に立つて行なわれるべきものである。その成果のいかなるものを、どのように、利用することが、最も教育上に効果があるかということは、これは社会科のみに限られた問題ではないのであつて、授業時間の制約、生徒の知識や思考能力の問題によつて、つねに取捨選択が行われることは、全学科に共通なのである。

「社会科」教育と「社会科学」との問題を、右のようすりかえてしまうことは許されるべきではない。もし「社会科」教育が「社会科学」に無関係とするなら、そのことを積極的に論理的に、科学してもらわねばならない。そうでないと、戦前の歴史教育と歴史学との問題の「二ノ舞」をするおそれがある。